九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

児童養護施設入所児童の「現在の自己評価」と「未来への希望」との関連性

飛永，佳代
九州大学大学院人間環境学府

針塚，進
九州大学大学院人間環境学研究院

https://doi.org/10.15017/15695

出版情報：九州大学心理学研究. 6, pp.181-188, 2005-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

Kyushu University Psychological Research
2005, Vol.6, 181-188

児童養護施設入所児童の「現在の自己評価」と「未来への希望」との関連性

飛永　佳代[1)]　九州大学大学院人間環境学府
針塚　　進　　九州大学大学院人間環境学研究院

The relationship between 'self-esteem' and 'hope' in children's institutions

Kayo Tobinaga (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)
Susumu Harizuka (*Faculty of human-environment studies, Kyushu university*)

The purpose of this study is to examine the relationship between 'Hope', 'Self-Esteem,' and 'Basic-Trust' in children living in child institutions. Using questionnaires and interviews, data were collected from 242 elementary school children, including 42 children from child institutions. Three kinds of questionnaires were used in order to measure their psychological consciousness: 'Hope,' 'Self Esteem,' and 'Basic trust.' The results were as follows. (1) 'Hope' was most influenced by 'Self-Esteem' in the children who living in child institutions and home-care-children (2) Children living in child institutions were more interested in 'rich' and 'comfortable' lives in the future than the home-care children.

Keywords: Child Institution, Hope, Self-Esteem

Ⅰ. 問題と目的

近年，児童虐待が大きな問題となり，その対応が求められている。しかし被虐待児の援助技法や援助視点の研究は充分ではなく，過去のトラウマに焦点を当てた援助技法の報告が主である（西澤，1999）。わが国において被虐待児が入所することの多い児童養護施設では心理職の導入も新しく，施設という生活空間での被虐待児への心理療法の在り方の検討は充分とは言えない。さらに養護施設に入所した児童（以下入所児童）は被虐待経験を持つ者ばかりでなく，複雑な生育歴を持つことが多く養育者に対しての喪失体験を経験をしている者もいる。そのような児童への援助を考える上で，トラウマの視点からの援助論だけでなく，より広い視野で入所児童の事情に即した援助の展開が必要であり，そのためにも様々な視点からの入所児童の特徴を捉える実証研究が不可欠であると思われる。

これまで，被虐待児への心理治療では，過去の体験が重視されてきた。そのような過去に焦点付けた手法によると，虐待を受けた時までクライエントを退行させ，虐待よって生じた心的外傷に対応させるという長期にわたる過程を要するものである。しかし実際は，虐待体験を訴えるクライエントは，過去だけでなく，現在・未来においても生活が制限されている（宮田，2003）。幼い頃の虐待体験はその後の対人関係，日常生活まで影響を及ぼすものだからである。また，実際に，児童養護施設という現場で児童を援助できる期間は限られており，児童は高校卒業時には施設を退所しなければならず，それまでに児童を自立の方向へと導く援助が求められている。そのようなことを考慮すると，過去の体験を重視し，過去にさかのぼるという発想と共に，入所児童がいかに自らの現在や未来に新たな可能性を見出し得るかに焦点を当てた発想が現実的な援助場面では必要となろう。以上の視点から，本研究では，児童が現在や未来に新たな可能性を持つことにつながる要因として「未来への希望」を想定した。

Erikson（1959）は乳児期の心理社会的危機として「基本的信頼感」と「基本的不信」のバランス関係で特徴づけ，この信頼と不信の葛藤から「希望（hope）」が生まれ，そしてこの「希望」こそ自我が生きていく力となると述べた。谷(1998)は乳幼児期に確立された基本的信頼感と時間的展望との関連を検討した。そして基本的信頼感が充分に獲得されていない場合には自分自身の過去を受け入れられず，現在の充実感を感じることできず，それが未来への絶望感に影響すると考察した。すなわち，谷（1998）は過去にされた獲得された基本的信頼感が未来への希望に影響することを示唆した。一方で，Quiton ら(1985)は養護施設で育った母親の育児行動の研究において母親の肯定的な学業経験が社会機能に関して有効であることを指摘した。その上で，それは肯定的な学業経

[1)] 本研究実施にあたりご協力頂きました小学校の生徒の皆さん，先生方に感謝いたします。また本研究実施を快諾いただいた和白青松園施設長江中宣夫先生ならびに職員の方々そして児童の皆さんに深く感謝致します。

験が母親の自己評価に与える影響によるものであるとした。また，飛永(2003)は入所児童を対象に動作法のリラクセイションを行い現在の不安を軽減することで未来への希望が上昇することを指摘した。以上の研究からは未来への希望の獲得には，乳幼児期における基本的信頼感のみならず，児童が現在の自分自身をどのように捉えているかという児童の現在の自己評価がより密接に未来への希望に影響すると考えられる。

以上のことから本研究では，入所児童の「未来への希望」には「現在の自己評価」と「過去に確立された基本的信頼感」のどちらがより影響するか検討することを目的とする。また，その影響の在り方を入所児童と家庭で養育されている児童との比較を通して，入所児童に見られる特徴を検討することも目的とする。

II. 方　法

1．対象児

（1）児童養護施設入所児童

A児童養護施設に入所している小学生1～6年生児童42名（男子17名，女子25名）であった（Table 1－1）。A児童養護施設は定員120名の大規模大舎制の施設である。なお，入所児童の入所理由はTable1-2に示すとおりである。

（2）家庭で養育を受ける児童

B県内の公立小学校1～6年生233名であり，うち有効回答は200名（男子107名，女子93名）であった(Table 1－3)。

2．調査時期

X年10月～12月にかけて質問紙調査を行った。

3．調査手続き

（1）児童養護施設入所児童

X年7月より週に2回，A児童養護施設にボランティアとして通い，入所児童と共に遊んだり，学習指導を行ったりした。児童と顔見知りになるだけでなく，生活場面に入ることでより身近な存在として児童に認識されたと考えられた。質問紙調査は施設内の居室棟とは離れた心理療法室で筆者と1対1で行った。

Table 1-1
養護施設入所対象児実数

	学年　小学校						総　計
	1	2	3	4	5	6	
男　児	2	2	4	4	4	1	17
女　児	5	5	6	3	3	3	25
総　計	7	7	10	7	7	4	42

Table 1-2
対象となった児童養護施設入所児童の入所理由（X年6月1日現在）

	行方不明	就労	長期疾病	行為・性格(虐待)	長期拘禁	その他	総計
男	17	9	9	11	5	5	56
女	14	11	12	11	5	3	56
計	31	20	21	22	10	8	112

Table 1-3
家庭で養育を受ける対象児実数

	学年　小学校						総　計
	1	2	3	4	5	6	
男　児	14（6）	13（4）	13	11（2）	17（2）	39（1）	107
女　児	8（5）	10（6）	23（1）	20（3）	21（2）	11（1）	93
総　計	22（11）	23（10）	36（1）	31（5）	38（4）	50（2）	200

（　）は欠損値を表す。

（2）家庭で養育を受ける児童

予め質問紙の実施要領を学級担任に説明し，それぞれの学級ごとで学級担任より一斉に質問紙を実施した。

4．調査材料

（1）「現在の自己評価」尺度

対象児が現在の自分自身をどのように捉えているかということを測定する尺度として，勝俣ら(2000)の熊大式コンピタンス尺度を参考に27項目の自己評価尺度を作成した。回答は「まったくそう思わない」から「とてもそう思う」までの6件法で求めた。

（2）「基本的信頼感」尺度

乳児期の基本的信頼感の問題が，その後どのような形の信頼感としてあらわれるかという Erikson(1959)の記述をもとにして谷(1998)が作成した基本的信頼感尺度11項目から，小学生には分かりにくい項目を削除し8項目を抜粋して使用した。また，小学校教員に依頼し，小学生に分かりやすい言葉使いに変更し使用した。回答は「まったくそう思わない」から「とてもそう思う」までの6件法で求めた。

（3）「未来への希望」尺度

C.R. Snyder (1991)の希望尺度子ども版6項目に「わたしは希望がある」「何かしてみたいことがある」という項目を加えた8項目を使用した。回答は「まったくそう思わない」から「とてもそう思う」までの6件法で求めた。

（4）「望む生き方」尺度

上野（1994）で見出された青年期の望む生き方を参考に，小学生にわかりやすい「お金持ちになって，らくにくらしたい」「有名なひとになりたい」「みんなのためにやくに立つひとになりたい」など6項目を使用した。回答は「まったくそう思わない」から「とてもそう思う」までの6件法で求めた。

Ⅲ．結　果

1．各尺度の因子構造について

（1）「現在の自己評価」について

Table 2
現在の自己評価の因子分析結果

項目		F 1	F 2	F 3	共通性
	α係数（全因子α＝.81）	α＝.84	α＝.61	α＝.64	
	【学習能力自己評価】				
27	思ったことを最後までできる	0.74	0.05	−0.01	0.58
12	いろいろな考えができる	0.74	−0.02	0.05	0.56
1	自分の考えをことばで表現できる	0.71	−0.18	0.17	0.55
11	自信がある	0.69	−0.02	0.23	0.62
24	責任感がある	0.62	0.02	−0.16	0.36
8	集中力がある	0.60	0.20	0.02	0.49
21	勉強ができる	0.58	0.21	−0.03	0.46
15	我慢強い	0.51	0.16	−0.01	0.35
	【社会的能力自己評価】				
10	＊わがままだ	−0.18	0.69	0.27	0.49
23	人にやさしくできる	0.32	0.61	-0.15	0.59
20	すぐに怒ったりしない	0.22	0.58	-0.20	0.47
16	今の自分でいいと思う	0.06	0.47	0.20	0.31
	【身体的能力自己評価】				
13	＊のろい	−0.30	0.33	0.75	0.60
5	運動が上手	0.26	0.01	0.69	0.67
2	体力がある	0.24	−0.19	0.67	0.58
	因子間相関	F 1	F 2	F 3	
	F 1	−	0.36	0.32	
	F 2		−	0.09	

平均±標準偏差の値が得点範囲を超えた項目，各因子に十分な寄与を持たない項目を除いた15項目について主成分分析法・Promax 回転による因子分析を行った。因子数は固有値の落ち込み，累積寄与率から3因子が適当であると判断された（Table 2）。

第1因子（8項目，α =.84）は，「いろいろな考えができる」「自分の考えを表現できる」「勉強ができる」といった認知能力への評価と「責任感がある」「集中力がある」「我慢強い」などの学校場面で重視されやすく，通知表などで評価の対象となる自己管理能力への肯定的評価で構成されているので，「学習能力自己評価」と命名され，その合計得点を学習能力自己評価得点とした。

第2因子（4項目，α =.61）は，「わがままだ」「思いやりがある」「すぐに怒ったりしない」などの項目で構成されており，「社会的能力自己評価」と命名され，その合計得点を社会的能力自己評価得点とした。

第3因子（3項目，α =.64）は「のろい」「運動が上手」「体力がある」などの項目で構成されたので「身体的能力自己評価」と命名され，その合計得点を身体的能力自己評価得点とした。また，累積寄与率は3因子で51.10%（第1因子33.27%，第2因子9.80%，第3因子8.04%）であり，全項目でα係数を算出したところ，α =.84であった。

（2）基本的信頼感について

平均±標準偏差の値が得点範囲を超えた1項目を除いた基本的信頼感の項目7項目に関して因子分析を行ったところ，第2因子以下の固有値が第1因子の固有値に比べて極端に低かった。したがって，基本的信頼感尺度は1因子構造であると判断した。よって基本的信頼感の7項目（α =.668）の合計得点を基本的信頼感得点とした。

（3）未来への希望について

希望尺度8項目に関して因子分析を行ったところ，第2因子以下の固有値が第1因子の固有値に比べて極端に低かった。したがって，未来への希望尺度は1因子構造であると判断した。8項目（α =.79）の合計得点を未来への希望得点とした。

2．各得点間の相関

各得点間の相関を Table 3 に示す。すべての組み合わせにおいて，5%水準で有意な相関が見られ，それぞれが相互に関連することが示された。未来への希望得点に注目すると，未来への希望と高い相関を示すのは，「現在の学習能力自己評価」（r =.764，p <.01）であり，次に「過去に確立された基本的信頼感」（r =.761，p <.01），続いて「現在の社会的能力自己評価」（r =.639，p <.01），「現在の身体的能力自己評価」（r =.639，p <.01）であり，「未来への希望」は本研究で想定した全ての得点と密接に関わっていることが示された。

3．入所児童と家庭で養育を受ける児童との比較

入所児童と家庭で養育を受ける児童との各得点の差の有無を検討するために，各得点を従属変数に t 検定を行った。その結果，両群間に「未来への希望」，「基本的信頼感」，「現在の学習能力自己評価」，「現在の身体的能能力

Table 3-1
入所児童の基本的信頼感・現在の自己評価・希望の相関

	希望	基本的信頼感	学習能力	社会的能力
基本的信頼感	.761**			
学 習 能 力	.764**	.498**		
社 会 的 能 力	.639**	.431**	.607**	
身 体 的 能 力	.556**	.486**	.426**	.333*

**p <.01　*p <.05

Table 3-2
家庭養育児童の基本的信頼感・現在の自己の在り方・希望の相関

	希望	基本的信頼感	学習能力	社会的能力
基本的信頼感	.623**			
学 習 能 力	.700**	.552**		
社 会 的 能 力	.376**	.514**	.475**	
身 体 的 能 力	.268**	.261**	.438**	.259**

**p <.01　*p <.05

Table 4　入所児童群と家庭で養育を受ける群の各得点の平均値の比較　（括弧内は標準偏差）

	施設入所児童 (N＝42)	家庭で養育を受ける児童 (N=200)	T 値
基本的信頼感	28.38 (6.18)	29.39 (6.15)	0.96
希　　望	37.26 (8.25)	35.49 (7.02)	−1.29
学 習 能 力	34.10 (8.60)	32.11 (8.05)	−1.44
社会的能力	16.48 (4.80)	15.14 (3.86)	−1.70*
社会的能力	11.38 (3.68)	12.25 (3.67)	1.40
友 人 関 係	16.81 (4.86)	15.84 (4.08)	−1.35

+p＜.10

自己的評価」には有意な差は無かった。しかし，「現在の社会的能力自己評価得点」（t＝−1.7，p<.1）において入所児童群が家庭で養育を受ける児童群に比べて高い傾向があることが示された（Table 4）。

入所児童と家庭で養育を受ける児童との間で望む生き方の志向性に差があるか検討するために，望む生き方の各項目得点を従属変数に *t* 検定を行った。その結果，「お金持ちになってらくにくらす人になりたい」（t＝−2.21，p＜.01）「自分がたのしいことだけをする人になりたい」（t＝−2.95，p＜.05）の２項目得点に関して入所児童群が家庭で養育を受ける児童に比べ有意に得点が高いことが示された。

4．学年間・性別間の比較

低学年・高学年間の各得点の差を検討するために，各得点を従属変数に *t* 検定を行った。その結果，家庭で養育を受ける児童群においては，すべての得点において，低学年が高学年に比べ有意に得点が高いことが示された。一方で，入所児童群においては，すべての得点において，学年間での有意な差は見られなかった。

また，男女差を検討するため，男女の性別を独立変数にし，各得点を従属変数に *t* 検定を行った所，「現在の身体的能力自己評価得点」において男子の方が女子に比べより得点が高いことが示された（t＝-2.54，p＜.05）。

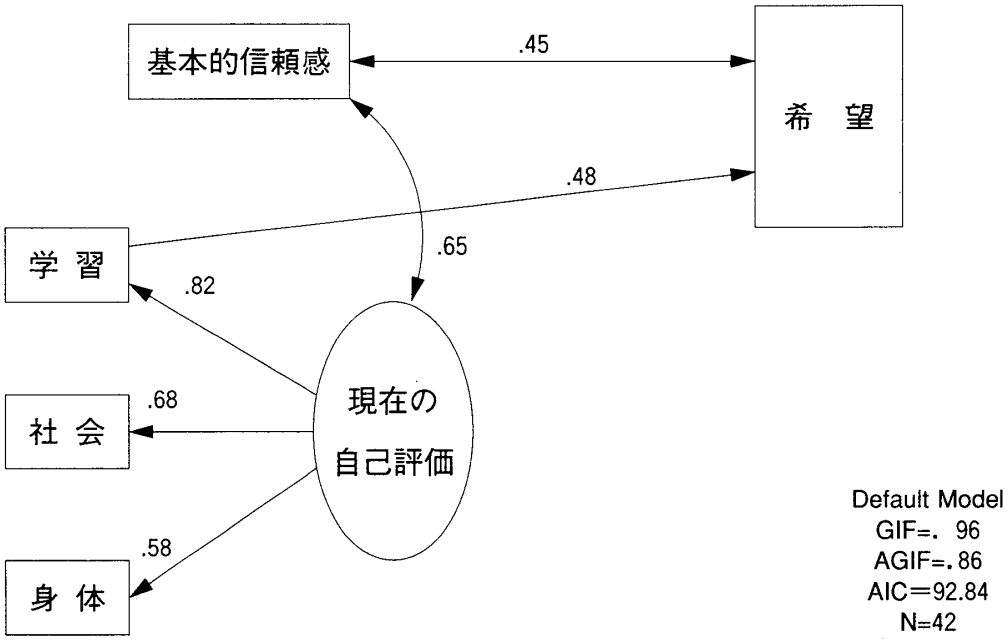

Fig.1-1　入所児童のパス図

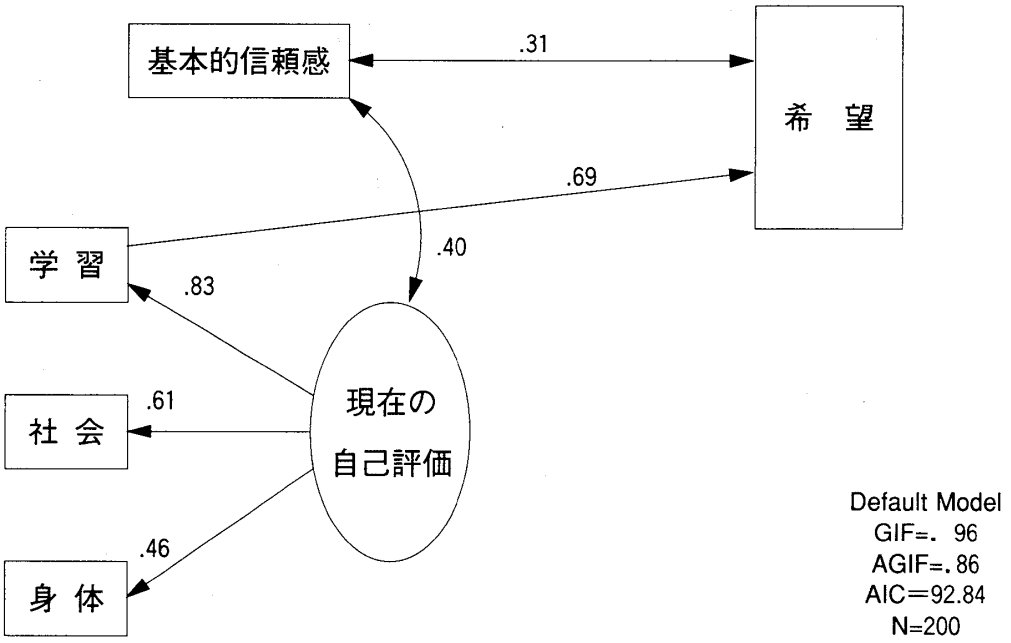

Fig.1-2　家庭で養育を受ける児童のパス図

5.「未来への希望」の解析

未来への希望には何が影響するのかを検討するために，入所児童群・家庭養育児童群のそれぞれにおいて，Amos によるパス解析を行った。手段としてはまず，「未来への希望」を目的変数，他得点を独立変数としてステップワイズ法による重回帰分析を行った。その結果，入所児童群では「基本的信頼感」「現在の学習能力自己評価」「現在の社会的能力自己評価」が有意であることが示された。また家庭養育群では「基本的信頼感」「現在の学習能力自己評価」が有意であることが示された。その結果から大まかなパス図を想定した後，考えられる全てのパスを試み有意なパスのみを残した。また，その都度適合度検定を行い，もっとも適合度の高いモデルを採用した。結果は Fig.1-1，Fig.1-2 に示した。両群とも，「未来への希望」は「現在の学習能力自己評価」にもっとも強く影響され，次に「基本的信頼感」に影響されることが示された。

Ⅳ. 考　察

1.「未来」「現在」「過去」の関わりについて

「未来への希望」「現在の自己評価」「基本的信頼感」との関わりを検討した結果，すべての組み合わせが中程度の相関を示していた。このような結果からは「過去」「現在」「未来」は個人の中で割り切れており独立して存在するものではなく，それぞれが相互に絡み合い，影響しあっていることが伺える。

「未来への希望」との関係に注目してみると，入所児童群，家庭養育児童群の両群とも「現在の学習能力自己評価」「基本的信頼感」が大変高い相関を示していることが分かる。つまり自分の学習能力への自己評価が高いことと基本的信頼感が高いということが，未来への希望と深い関連があるということであると考えられる。また，入所児童群では家庭養育児童群に比べ，「現在の社会的能力自己評価」「現在の身体的能力自己評価」と「未来への希望」の相関が高い。これは，入所児童が集団で暮らしているということと関連していると考えられる。対象となった児童養護施設は大舎制をとっており，建物全体が生活単位となっている。つまり，いつも他の児童の中で生活しており常に他児との交流を求められるため「人と仲良くできる」等社会的能力が重視されがちである。また，集団で暮らすため「効率の良さ」を求めがちになってしまう。そのような中で「素早いこと」は「遅いこと」よりも肯定的に評価されていると思われる。したがって，施設で生活する入所児童の「社会的能力自己評価」「身体的能力自己評価」が家庭で養育を受ける児童に比べ，高く「希望」と関係したと考えられる。

2．入所児童と家庭で養育を受ける児童との「自己評価」「基本的信頼感」「未来への希望」の比較

入所児童群と家庭養育児童群の間に「過去に確立された基本的信頼感」「現在の学習能力自己評価」「現在の身体的能力自己評価」「未来への希望」得点の間には差がないことが示された。

入所児童は人生早期に養育環境を喪失した児童であり，臨床的に基本的信頼感が十分でないことの報告は多い。しかし，入所児童と家庭養育児童との基本的信頼感得点には差がないことから本研究においてはそのような結果は見られなかった。その一つの理由としては，本来基本的信頼感は養育者との間で形成されるものであるが，親に対する喪失感などが潜在しつつも，養護施設という安定した環境の中で継続して関わる職員などとの間で本研究で用いられた尺度で表現される水準の「基本的信頼感」は育まれている可能性を示唆するものと考えられる。

次に「未来への希望」に関しても，入所児童群と家庭養育児童群の間には有意な差は見られなかった。施設入所児童も家庭で養育を受ける児童と同じくらい「未来への希望」を持っている可能性が示唆された。児童養護施設入所児童においては学力の低さ，高校への進学率の低さ，また中退の多さなどが指摘されているがそのような問題への理由によく「希望の持てなさ」が挙げられている。しかし本研究からはそのようなことは支持されなかった。このことは，対象児童が両群とも小学生であることから，まだ将来に対する自分を客観視しないという認知的発達水準が影響しているとも考えられる。しかしながら，望む生き方に関しては，入所児童群が「お金持ちになって楽な暮らしがしたい」「自分が好きなことだけしていきたい」という項目において有意に得点が高かった。入所児童は幼少期から複雑な生活暦を持つ児童が多い。そのようなことから，小学生という早い時期から，自分自身の生き方の志向性が家庭で暮らす児童より「楽に」「好きなことだけして」生きて生きたいという率直な思いが強いためと考えられる。

本研究では「未来への希望」を一義的に量的に捉え，比較検討をした。しかし，上記のように，未来に対する児童の志向性の内容には差があることが示された。さらに現実的には，入所児童の進路は家庭で養育を受ける児童に比べ限定的と言わざるを得ない実状である。そのようなことを考えると，今後，児童にとっての「未来への希望」の内容を質的に検討していくことが必要であると考えられる。

一方で，「現在の社会的能力自己評価」は児童養護施設入所児童群が有意に高く評価していることがわかった。これは，Sandra（1994）が施設の子どもは同輩との相互関係能力は家庭で育った子どもより高かったことを報告と一致する。入所児童は集団で暮らしており，一日中他の児童や職員とともに生活をしている。その中で自己への社会的能力への肯定的評価を養ったもの思われる。

3．学年間の差について

家庭養育児童群において低学年・高学年との差を比較したところ，すべての得点において低学年の方が高いという結果が出た。すなわち高学年になるほど，現在の自己評価，基本的信頼感，未来への希望のどの項目に関しても得点が低くなるということである。これは，低学年の頃は，まだ自己や周囲を見る目が鋭くなく，自己のどの側面に関しても自己評価が高く，自己を客観的対象化して捉えることが少ない，いわば幼児は万能感のような状態が想定される。しかし，高学年になり他者との関係の中で自分を捉え直し，客観的に自己を評価するようになるので高学年は自己評価が下がることが考えられる。つまり高学年になるにつれ自己評価が客観化し，より現実に即したものになっていくことが考えられる。Rosenberg（1979）が８歳から18歳までの児童を自尊感情を測定し，自尊感情は２・３年生がもっとも高くあとは６年生にかけて低下することを指摘しているが，本研究も同様の結果を示した。

他方，入所児童群において低学年・高学年の比較をしたところ上記のような傾向は示されず，「現在の学習能力自己評価」のみ低学年が高いという結果が示された。施設入所児童は幼少期から様々な現実に直面するような厳しい生活をしてきた児童も多い。その過程の中で，周囲との関係を通して自己や周囲を客観的に鋭く見てきたものと思われる。つまり，入所児童においては，一般的な年代の特徴を反映しにくいことが示されおり，入所児童一人ひとりの発達を丁寧に見て，その個人内の変化を捉えていくことが重要であると考えられる。

4．「未来への希望」は何によって影響されるのか

入所児童群，家庭養育児童群どちらも「未来への希望」には「現在の学習能力自己評価」がもっとも影響することが示された。「現在の学習能力自己評価」は「意志が強い」「集中力がある」「我慢強い」などの学校場面でより重視され，通知表などで評価の対象となる項目が多く，家庭や施設においても評価の対象となる項目であることが推測される。つまり，学校においては教師や他の児童から家庭では保護者やら職員からの評価される機会が多い項目であり，その評価が自己評価に深く結びつき，「自分はできる」感覚につながりそれが「未来への希望」にもっとも影響を与えていると考えられる。このことは，学童期の有能感は勉強やスポーツ等への取り組みや成績などと関係するというエリクソンが指摘にも関連すると考えられる。

また「過去に確立された基本的信頼感」よりも「現在

の学習能力自己評価」の方がより強く「未来への希望」に影響するということが示されたことを考えても,「希望」を見出せるか見出せないかは「現在」の自己の捉え方と自己への評価という価値付けが重要であると考えられる。とりわけ現在の自己の諸側面の中でも「集中力がある」や「いろいろな考えが出来る」といった大きな意味での「学習能力」に対する肯定的な自己評価がもっとも「希望」に影響することが示された。

V. 結 論

本研究では, 施設入所児童という過去に様々な喪失体験を持つ児童の施設生活や学校生活の適応への援助を考えるあたり, 児童の過去の体験を重視する視点からではなく, 児童がいかに現在のあり方や・未来の可能性についての希望を持つことができるのかという視点からの検討を行った。すなわち児童の「未来への希望」の有無には何が影響するのかということを検討した。その結果, 幼少期に養育者との間で獲得されるとされる「基本的信頼感」よりも, 児童の「現在の自己評価」が, 未来を希望的に想定することができる要因であることが示された。このことから, 入所児童の援助視点として,「過去」のみならず, 児童が「現在」どのような体験をしており, 自分自身をどのように捉えているかということが重要であることが示された。すなわち, 援助の視点として「現在」「未来」に焦点を当てることが有効である可能性が示唆されたと言えよう。

今後の課題としては, 入所児童の援助を考えるにあたって希望の有無という量的な側面だけではなく, その質的内容の検討が挙げられる。さらに, 実際に進路が問題になる時期は中学生・高校生であることからも, 中高生の入所児を対象にした, より詳細な実証的検討が必要であると考えられる。また, 本研究で得られた視点を援助的に展開するためには, 児童の現在や未来に焦点を当てた援助過程の事例的な検討等を含めより臨床的に検討することが必要であると考えられる。

引 用 文 献

C.R.Snyder 1994 *The Psychology of Hope*. FREE PRESS

D.Quinton & M.Rutter 1985 Parenting behavior of mothers raised 'in care', in A.R.Nicol(ed.), *Longitudinal Studies in Child Psyuchology and Psychiatry*

Erikson,E.H. 1959 Psychological Issue : Identity and the life International University Press, 小此木啓吾（訳編）1973 自我同一性―アイデンティティとライフ・サイクル 誠信書房

勝俣暎史・篠原弘章 2000 熊大式コンピタンス尺度の開発と妥当性(2): 小学生の問題行動との関係日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 187.

宮田敬一 2003 児童虐待へのブリーフセラピー 金剛出版

西澤哲 1999 トラウマの臨床心理学 金剛出版

Rosenberg,M. 1979 *Conceiving the self.* New York: Basic Books

Sandra R. Kaler and B.J.Freeman 1994 Analysis of Environmental Deprecation: Cognitive and Social Development in Romanian Orphans, *Journal of Child Psychology and Psychiatry* Vol.35, No4, 769-781

谷 冬彦 1998 青年期における基本的信頼感と時間的展望 発達心理学研究, 9, 1, 35－44

飛永佳代 2003 児童養護施設入所児童の心理的安定化に向けた動作法の適用 リハビリテイション心理学研究, Vol.30(2)

上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富護 1994 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究, 42, 21－28